若者の声

◆パネリスト

林　宏美	本田技研工業（株）埼玉製作所 塗装・樹脂工場化成１モジュール
大村恵美	篠宮竹細工所
瀬下　素	ワタミフードサービス（株）社長室広報担当
高成田健	日本労働者協同組合連合会センター事業団 東関東事業本部事務局長

◆司会

玄田有史	東京大学社会科学研究所助教授

【日本の若者の現状】

玄田有史

今回「グローバル化と若者の未来に関するアジア・シンポジウム」ということでさまざまなセッションが行われています。この一時間あまりのセッションは、じかに若者から話を聞いてみようというセッションです。

今、日本の若者は非常に生きづらさを感じています。生きることが苦しい。さまざまな国の比較調査を見ましても、将来に対して希望がない、未来を感じられない、そう答える若者の割合は、日本が他の国に比べても極めて高い、突出していると。実際その将来に対する難しさを感じている兆候というのはさまざまな現象としてあらわれています。今、日本経済は徐々に改善したとはいえ、まだ10代とか20代の失業率は非常に高い水準が続いています。また、失業者ではないにせよフリーターというふうに日本語で呼ばれている正規の仕事ではない人達が増えていて、なかなか安定した仕事に就くことができません。また、1998年以降日本では少年犯罪であるとか非常に難しい問題が増えてきています。最近では、失業者でもない、フリーターでもない、働くこと自体に希望を失った若者達、これは日本語では「ニート」（ＮＥＥＴ）と呼んでいます。ニートというのは、”not in education employment or training”の頭文字をとってニートと言っています。こういう働くこと生きることに対して難しさを感じている若者が非常に増えている。

いったいどうすればいいのか。日本だけでなくこれからアジア各国も抱えていく問題でしょう。ただ、その中ですべての若者が苦しい状況にあるわけではない、また苦しい状況にありながらも、そこで自分自身どうしていけばいいのかいろいろ試行錯誤を重ねながら自分自身の未来を切り開いていこうとする若者達もちゃんといます。今日はこの四人の方々に集まっていただきました。

【若者の紹介】

林さんはものづくりという現場で働いていらっしゃる方です。グローバル化の中で日本

の製造業は果たしてどうなっていくのか、苦しいことが多いのではないか、そう思いながらも実際お話をうかがうと、林さんの話は大変明るい、将来に対する未来を感じさせてくれます。大村さんもいわゆる職人という世界で生きていらっしゃる方です。学校を卒業して、先生もしくは親方のもとで働きながら、今その職人の世界に飛び込んで自分の未来を切り開いていこうとしている。グローバル化の中で、職人なんてものはもうこれから難しいのではないかと悲観的な意見が多い中で、あとで大村さんはどういうことをおっしゃるのでしょうか。また瀬下さんが働いていらっしゃる会社というのは、いわゆるサービス業の会社です。日本全体のフランチャイズチェーンとして 400 店舗を超える居酒屋を経営されている、そういうサービス業で働いてらっしゃる方です。そのフランチャイズチェーンで働いている若者というのはいわゆる正規の職員ではありません。多くはアルバイトとかパートというかたちで働いています。パートやアルバイトなんて仕事は単純な仕事ばかりでつまらない仕事ばかりなんじゃないかと思っている人がたくさんいます。果たして本当にそうでしょうか。またいろいろな店舗を任されて自分が店長になったり自分自身でお店を切り盛りしたりしていく、そういう思いで働いている方達もこのサービス業の中ではたくさんいらっしゃる。いったいそういう正社員以外のかたちで働いている人達が、今何を考えまた彼らをもっと応援していくために私達は何ができるのか。高成田さんは労協ワーカーズコープいわゆる非営利の活動をされています。今日本では NPO が急速に増えてきました。そうはいっても先進国の中で、日本は NPO とか非営利で活動されている方が極めて少ない。その中でも若者が新しい働き方としてこの NPO 非営利の活動に注目しています。今私自身多くの若者に会うと何か社会のためにやりたいんだと自分のためではなく社会のために何かをしていきたいんだ、そこでやりがいを感じたいんだと思っている若者が非常に増えている。高齢者や障害者をサポートしながらそういう自分自身の未来に対して社会に何かをしていきたい、そう感じている若者が高成田さんの所を訪れます。いったい彼らは何を考え、また高成田さん自身も何を感じるのか、そういう話をこれから聞いていきたいと思っています。

まず最初に、４人の方の自己紹介を兼ねまして、ビデオを皆さんに御覧いただこうと思っています。まずはそのビデオを御覧いただいてから四人の方から直接お話をうかがっていきたいと思います。

ビデオ上映

４人の職場の様子や､仕事に対する考え方等についての本人や上司へのインタビューがまとめられたビデオが上映された。

【働く姿】

玄田

15 分ばかりのビデオを御覧いただきました。どうでしょうか。皆さんが日本の若者について感じてらっしゃったイメージと同じか違うか。日本の若者は元気がないとか、何考えているか分からないとか、無気力だとか、そういうことをお感じのことが多々あったかと思います。ただここにあらわれている姿は決してそういう人達ばかりではないということ

を短い映像ですけれども多くのことを語っているように思います。高成田さん御自身も含めて４名の方の働く姿を見て率直に何かお感じのこととかおありですか。

高成田健
　はい。林さんとか大村さんはまだ 20 代そこそこで、瀬下さんや私は、当時は遊んでいましたよね。学生で、将来何するか、働くなんてことは全くイメージしてなかっと思うのですけども、その歳でもうこの道で食べていきたいというふうに決められるというその度胸がすごいと思っている。やっぱりやめようとか思ったりはしないのですか。

林宏美
　やめようとはあまり思わない。今の仕事がとても楽しいので。

玄田
　しんどいこととか全然ない？

林
　交替制がしんどいです。

玄田
　何がしんどい？

林
　朝起きるのが。

玄田
　何時に起きるの？

林
　朝早いと６時半に仕事なので家を４時半には起きて支度して出ていかなくてはいけなくて、それがしんどいです。

玄田
　人間関係のしんどさは？

林
　周りが気をつかってくれるのでとてもよい関係にいます。

玄田
　大村さんは仕事をやっていて大変だなと思うことはどんなことですか？

大村恵美

私自身はあまり大変だと感じない。けがなどはしますがそれでやめたいとは全然思わない。とにかく途中でやめたくないのもあると思います。

玄田

瀬下さんはこの二人のビデオを見た印象はどうですか。

瀬下素

私より若い方ですが、自分の道をもって進んでいるというところに共感する。皆さん自分より年代が上の方と一緒に働いている中で、自分の場所を見出して楽しく仕事をしていることにとても好感が持てます。

玄田

大村さんは林さんとは違うと感じたところがありますか。

大村

つくるというところでは似たところがあるので、林さんとは同じだなと思いました。瀬下さんや高成田さんは人に教える側で立場が上位だが、自分は下なので分からないところもあるのですが、それでも年代の上の方と一緒に働くということで、憧れというかいい目標になった感じがします。

玄田

高成田さんはどうですか。

高成田

確かに製造業ではある意味自分たちで開拓するというか、つくっていく、瀬下さんなら新しいお店をつくったりだとかいうところがあります。私でいうと、新しい公共サービスですとか福祉の現場を今の時代にそくして新しいものをつくっていく喜びがあります。非営利なので食べていけるかという問題があるのですが、あまり大きな会社の歯車で自分がどこになっているのか分からないというよりは、直接実感できるという仕事に非常にやりがいを感じています。

玄田

その意味では林さんは日本を代表する大きな会社だよ？

高成田

そうですね。ある意味非常に単純作業ですよね。すごく地味な仕事の感じがすると思うのですが、それを 10 代の女性がやっているとは驚きを隠せない。

林

単純作業の中にも私がしっかりやらないそのあとの工程が大変になってしまうので、単

純だけど私のところは大事なところだと思っていつも仕事をしています。

玄田
　だけど何が単純作業だろうか？ワタミで働いてらっしゃるアルバイトの方達も人から見るとね…。ワタミではアルバイト用のマニュアルがあるでしょ？

瀬下
　はい。ワタミには単純作業のマニュアルはあるのですけれども、モットーとしましてマニュアルは捨てろといっています。

玄田
　どういうことですか？

瀬下
　すべてはお客様のためにお店の中で自分がお客様のためにいいと思うことだったらマニュアル以外の事でもやってもいい。それでお客様が喜んでくださってありがとうっていってご満足して帰ってくださるならどんどんやりなさいという社風があります。

玄田
　自分で判断して考えろということですね。

瀬下
　社員もアルバイトもそうですが結構自分で試行錯誤して取り組むという姿勢があります。

玄田
　瀬下さんご自身が店長をされていたことがありますが、そのとき働いていた店員さんにどんなことをおっしゃっていたんですか？今おっしゃった、自分で考えろマニュアルを捨てろとご自身としては。

瀬下
　まずお客様を思う心を持ちなさいというのが一つ。心の面とあとは技術面。おじぎ。あいさつ。トレーの使い方など。二つのうち技術だけではやはりいいお店はできないけれども心だけでもやはりいいお店はできなくでふたつをバランスよくのばしていく。今ワタミでアルバイトをしている子は１０代がほどんどで、高校生以上の子が多く働いている。初めて仕事をする場合、まだお金をもらうという意識がなかったりとか、自分のした作業に対する責任をあまり感じていなかったりとかします。こういった子に対して仕事の作業を教えると同時にそれだけでなく働くってどういうことかそういう心まで教えられたらいいなと思っていました。ただ単に時間とお金をひきかえるだけじゃなくてそれ以上のものを伝えることでどんどんいいお店もできるしアルバイトさんのためにもなる、そんなお店を心がけていました。

【若者を支える周囲の人々】

玄田

これまで日本の社会において特に働くということには学校を卒業していわゆる正社員になってその中でさまざまなトレーニングを受ける、具体的にはオンザジョブトレーニングと呼ばれる仕事をしながら学んでいく、その中でいろいろな経験をしてスキルや能力を高めていく、それが結果的に年功的な賃金になるとか長期雇用になるとか人が人を育てるということを非常に重要してきた国である。それが日本経済の繁栄を招いた。それがあるときからそういうやり方は古いのではないか、人を育てていくなんてこのグローバル化の変化の激しい時代にのんびりしたことはできない、もっと自分自身で能力を高めていく、学校を卒業したらすぐに役立つ力を身に付けていなければならない、即戦力にならなければならない、そのことが特にこのバブル経済が崩壊したあとに強く言われるようになりました。ただ、今の映像を見る限りでも思うのが、果たしてそんなに自分自身の力だけでできることっていったいどれくらいあるのだろうと。最初の映像もそうですし、大村さんとかもそうですけども、やっぱり人を育てていくためには育ててくれる人材がいて、その人たちが時には厳しく、時には優しく、若い人たちを育てていく、こういう人を育てるということを大事にしない限り、なかなか日本経済というのは未来はないんじゃないか。大村さん（ビデオの中で）篠宮先生はあまり怒ったりしないと言っていましたが、実際怒られたり褒められたりされたことはないのですか。

大村

はい。強く叱られたりすることはない。

玄田

そのなかで先生から言われたことで強く覚えていたり記憶に残っていることはありますか。

大村

怒られたことはないが、この仕事というか修行をして先生のほうからなにげなく「こういう作業をすること、つくることは君には合ってるのかなあ」と、褒めていただいたりそういうふうに認めてもらえたときに「すごい先生がそう見てくれるなら、ああいいんだな」って、すごくうれしかった。

玄田

どんな高校生でしたか？

大村

特にこれといって。今こういう芸術的なものに関わっていますが、美術を専攻していたとか何かつくっていたとかそういうことをまったくやっていなかった。

玄田

そういう意味では千筋（せんすじ）との出会いは大変大きかった？

大村

はい。この仕事に出会ってなかったら何をしていいのか分からず無目的のまま過ごしていたのかなと思う。

玄田

林さんは会社ではほとんど男性ばかりだと思うのですが上司から叱られたりほめられたり何でもいいのでありますか？

林

色の設定を間違えてしまったときに。私の仕事は中塗り色を設定する仕事で。

玄田

皆に分かりやすく言ってあげて。塗装の仕事かな？

林

塗装の仕事は、まず溶接工場から鉄板のボディを受け取り、塗装前の処理（脱脂､洗浄､被膜）を施し下塗りをします。次に中塗りという下地の色を塗りさらに本塗装をし、

出来映えを検査した後に、完成車の組み立て工場にボディを渡します。これが私たち

塗装工場の仕事です。その中で、私は中塗りの下地処理の工程に所属しており、下地色の設定をしています｡あってはならないことなのですが､色の設定を間違える時があって、そういう時ちょっと｢やったな｣って感じで言われましたけど、でも｢間違えは誰にでもある｣と言われて､｢次は、何故間違えたかを考え対応して、再発させないようにすればいいから｣と、上司からアドバイスを受けています。

玄田

彼女が勤めている会社は本田技研という創業者が本多宗一郎という方の考え方が今でも息づいていて私も好きなのですが、入社すると最初に失敗する人間が一番偉いんだってことをいわれますよね。チャレンジしていくことを失敗することをおそれないということを強く言われるところで、多分さっき私が言ったように今若い人達が即戦力にならないといけない、すぐに通用しなければならないということでなかなか失敗するということが認められていないのではないか、ちゃんと失敗させてあげないとやっぱり苦しいだろうということ。今最初に話した苦しさというのは日本の若者達は早い段階でやりたいことを見つけなさいとか、自分の目標を持ちなさいとか、そういうことをすごくいわれている。普通やりたいことなんて簡単に見つからないし特に十代や二十代でやりたいこと見つけるなんて難しいはずなのに見つけてうまく振るまえとかいわれてしまう。やはり今日本の若者がやりたいことが見つからないというのは本人達が決して甘えていたりなまけているからではなくて、さっき育成っていいましたけど、若い人達はちゃんと失敗させてあげたりすると

いうことがこれからの社会本当に必要なんじゃないかという気がします。高成田さんは、実際、高齢者や障害者の方をサポートする仕事をしながら若い方にもたくさん出会われると思うのですけど、どういうことを今の若い人達についてお感じですか？

高成田

はい。午前中の厚生労働省の説明の中にもありましたように、デュアルシステムと呼ばれる講座と現場の仕事を実際組み合わせてやる仕事もやらせていただいています。今、三十歳以下の若年層の訓練などもやっているのですけれども、非常にこの福祉の分野に若い人が今興味を持っているというか、関心をもっているということを感じています。それはなぜかというと、皆さん共通すると思うのですけど、ビデオでも言っていましたけども、直接返ってくる、その笑顔が直接返ってくるとか、感謝される、そういったことに携わりたいという若者が増えてきていると思っています。そこの訓練が難しい所で、ただ介護の技術を身につけさせればそういうところに進めるのかというとそうではありません。私たちが大切にしているのは、どちらかというと心というか気持ちで、相手のことを思いやってサービスをする、介護をするというようなことを、どのように理解してもらうか、そういったことが非常に重要かなと思っています。

【コミュニケーション】

玄田

高成田さんの所に訪れてくる若い人達の特徴とか感じることはありますか？無気力なのではとか力がないのではないかとか。

高成田

確かにコミュニケーションというところで、異世代と、介護でいうと、自分の両親より上のおじいちゃんおばあちゃんと話をするわけですが、それが非常に苦手な方が多い。そういう方々といかにスムーズに話していけるようにするかというところが難しいです。

玄田

こつはありますか？

高成田

私が思っているのは、あんまり相手を楽しまそうとかお世話しようというふうに気負わないことです。やはり自分が楽しいと思うことを話したりやったり自分も一緒になって笑うというふうにしないと相手はこんな若造に笑わせてもらっていると思ってやはり楽しくはないので、自分が常に楽しく感じるような接し方というのは非常に必要ではないかと思います。

玄田

林さんもビデオの中で誰とでも話せるようになったとおっしゃっていましたが、最初からうまくいきました？

林
　最初私は休憩室ではしゃべらなかった。

玄田
　どんなきっかけでしゃべるようになった？

林
　きっかけは班の班長さんがよく世話してくれて周りの人も話しかけてきてくれて、それで話せるようになりました。

玄田
　あんまり学生時代はそういう自分と全然歳が違う人達と話す機会ってないですよね？

林
　はい。

玄田
　話してみてどうですか？楽しい？価値観も違うし性別が違うとなかなか話が合わないなんてことも多いじゃないですか？

林
　そうでもない。気を遣ってくれているのかわからないんですけども、周りの方と普通に会話もできますし、楽しく会話させていただいています。

玄田
　大村さんも竹細工の人と仕事していると年齢の違う方も多いと思うんですけど、何か感じたり何か気をつけたりしていることはありますか？

大村
　自分の親方も自分より年上の方で他の竹だけではなくて木工とか漆とかいろいろいらっしゃるんですけども、そういう人達もすごく年齢が上で、向こうの親方の方からもいろいろ話しかけて下さいますし、私のほうも親方達の話を聞いているといろいろ参考になることとかもさらっと言っています。

玄田
　例えばどんなこと言っている？

大村
　自分の業種だけでなくて、木工のほうは関係ないのだがこの木はかたいとか、こういう

この木目がなんとかという専門的な話なのですが、まったく違うようでいて物作りというところは同じ業種です。そういう自分の専門的なものだけじゃなくていろんなものの知識を自分の中に取り込んでさらに竹に生かせるのではないかということもやっと最近気付きまして、それで、本当に話を聞いているだけでも参考になります。

玄田

自分自身がこれからこの仕事を続けていって、話を伺っている方の年齢に自分がなったときそこまで続けていく自信はありますか？

大村

確かな自信はない。

玄田

正直いって最初にお話しましたが、職人の世界は決して楽な事ばかりではないですよね？

大村

はい。地味だし華やかではない。

玄田

将来に不安はありますか？

大村

不安はありますがそれを自分で解決していく、やりがいもそれと同じくらいあるという感じなのでそれにつぶされないように自分でしっかりしてどんどん切り開いていくことを心がけています。

【それぞれの目標】

玄田

そうですか。自分が自分のボスになると英語では being my boss といいます。今の日本の若者に起きているさまざまな変化の中で、自分でリーダーになるとか自分で会社をつくろうとか、自分のお店を持ちたいとか、他の先進国に比べてやや弱くなっている。アジアの中で見ても。自分で自分がボスになるなんてそんなリスキーなことちょっと失敗すると心配だということで、日本の若者が選択したくないなと思っている、そういう統計をみたことがある。実際サラリーマンの雇用も苦しいのですが、自営業というのも減っていて、若い人達が自分でボスになるという選択肢がなくなって自営業が減っている。これからちょっと大きなことをうかがいます。瀬下さんがお付き合いされているその会社の方で、その店長さんのかたとかは必ずしも経営者ではないかもしれませんが一つの店を任されている人材として自分が一つの店を持つとか経営者になる、そういう人がこれからは増えていくといい。例えばワタミフードの渡辺社長などは今日本で非常に注目されている社長なん

ですが、これから日本で若いリーダーがどんどん育っていくためには社会にどんな環境がもっと整う必要があると感じますか？

瀬下

私の会社では、働いている人は皆若い。若い会社で今年ちょうど創業 20 周年を迎えました。周りで一緒に働いている方も若いし、部下も若いし、その中で今私の会社にいる人達は、明確に目標を持った人達がほとんどです。

玄田

例えばどんな目標ですか？

瀬下

30 歳までに自分の店舗を持つ、独立して自分の会社を持つ、そして何店舗かの経営者になるとか、農業にも取り組んでいて、農場とかもある。今は店長としてやっているが何年後かには、農場で働くようになりたいとか、皆さん明確な夢を持って働いています。この明確な目標というのが自分の仕事に対してやる気もでてきますし、あとは今の自分と目標の自分の差を埋めていかないとそこにはたどり着けないので、ちょっとつらいことがあったとしても頑張れると思う。しっかりとした目標を持ちながら働くというのは必要だと思います。

玄田

あなたの目標は何ですか？

瀬下

私の目標は、やはり自分でお店を持つことですが、今はそこからは外れています。今の仕事は移って一年も経ってないので、アシスタント的な、私の仕事のかわりなんていくらでもいるような仕事をしています。あと 5 年くらい先には、もう自分がいないとどうにもならないくらいの存在になりたいと思って勉強しているところです。

玄田

高成田さんの目標は？

高成田

学生時代に障害児と関わるようなボランティア活動をしていて、その時に、障害を持った方々の働く場所が世の中になかなかない、どちらかというと日本の福祉というのは高齢者の方もそうなのですが、おおざっぱにいうと山奥で、ひとくくりにさせてあまり害がないようにという感じですね。しかし、最近はそうではなくて、どういうふうに共存していくかとか、政策も含めかわってきている。そういうものを自分自身がつくっていきたいなと思っています。そのために一番こわいのは福祉というのは視野がどんどん狭まっていってしまうことなので、どれだけアンテナをいっぱいもって情報をとれるかというのがすご

く重要だと思います。

玄田

情報のアンテナをひろげるためにご自身は何か工夫していることはありまか？

高成田

テレビはある意味情報が一方的に流れているが逆にあまり知識にならないことが多いので、積極的に情報をとるために、本を読んだり、文字をなるべく追うようにと思って新聞を読んだり、というように最近立場的なことも含めてやるようになっています。

玄田

お話をうかがっていてもそうですしビデオの印象もそうなのですけれども四人の方は決してアグレッシブな感じはしません。これは自分がやっていくんだというようながつがつとした目標というか、そういうのはあまり感じません。私も大学で若い人達とつきあっていたりいろんなかたにお話を聞いていたりても、すごくなにか途方もない夢をもっていてそれを実現するために邁進するというのは若者の中でもかなり珍しいほうだと思う。ただその中でどうすればいいのか、実際なかなか目標が持ちにくい時代の中で、自分自身が、すぐには届かないかもしれないけれどもちょっと努力すれば実現できるのではないか、そういう自分にとって具体的な目標を持つことが今の中では非常に重要になっている。しかもその目標というのは自分の中だけではなかなか設定できないから、世代が違う、環境が違う人とのつながりというのを大切にしたい。四人のお話でもやはり人とのつながりというのをたいへん大切にされていて、そこから学ぶことが多いという発言が多々出てきます。おそらくこういう状況は、多くのアジアの国々でもこれからもうすでに起こっていることかもしれませんし、ますます起こってくるのではないでしょうか。経済が成長段階にあるときには、具体的に自分自身の目標を持つということは必要ないのかもしれない。もっといい家に住みたいとか、もっといい車に乗りたいとか、ホンダでも高級車にのりたいとか。ただこれがある程度成熟段階になると、なかなか目標が持てなくなる。社会も持てなくなるし個人ももてなくなる。そういうときに一人一人の若者がどう自分に合った目標を設定していくことができるのか、そのために社会がどうやって若い人達とどう関わっていくのか。今の日本の若者の苦しさは全部自分自身で考えなさいとか、自分自身の力できりひらいていきなさいということをやや強調しすぎている感じがする。育成の大切さとかもっと上の世代の人間達がどう若者達に関わっていけるのか、こういうことについてもっとひろがっていかなければならないと思います。高成田さんがやっている活動というのも、広く社会に新しいネットワークをつくっていくという一つの大きな試みであろうと思っている。さて、今日は時間も本当に短いので皆さんから一言二言いただくことになりますがどうでしょうか。今まで仕事をやっていて、楽しいことばかりで不満はないと林さんはおっしゃいますけど、実際これからの目標で何か感じていることはありますか。

林

これからの目標は、まだ入ったばかりで会社のこともよく分かりません。

玄田
　なんで私はここにいるんだろうという感じはしませんか？

林
　そうですね。誰からも頼られる人になりたい。なんでもできるような人になりたいと思います。

玄田
　そのためには何をすればいいのですか？

林
　まず目先のこと、自分の工程のところをできるようになって違う工程のところも覚えてちゃんとしていきたいと思います。

玄田
　そのために自分に今なにが欠けていますか？

林
　欠けているものは違うことを覚えることです。

玄田
　違うこととは？

林
　違う工程のことです。

玄田
　今の自分の工程だけでなく隣の工程も覚えることだね。覚えることによって何が変わってきますか？

林
　覚えることによって自分の視野がひろがると思います。

玄田
　具体的ですね、ありがとうございました。大村さんはこれからのご自身の目標とはどうでしょうか？

大村
　はい、私は職人になるにはとても時間がかかるというか、技術の習得とはちょっとやっ

てすぐできるというものではないのでこれからずっと続けて自分のものにしていくということです。とにかく続けることがとても大切なことなので続けていきます。また、ビデオにもありましたが、これまでは職人さんもつくっているだけでよかったんですけども、これからはつくるだけではだめで、店頭に出て販売ということも考えないといけなくなりましたので。

玄田
　それは大村さんは得意なほう？

大村
　とても苦手です。人前に出るのがとても苦手なので。

玄田
　では今日も大変ですよね。そういうことも考えないといけないのでそのために自分自身がどうかわっていかないといけない？自分から何を変えていかないといけない？

大村
　今感じていることは、人とのコミュニケーションのとりかたです。自分をピーアールする、商品をピーアールする力が足りない。

玄田
　その力を身につけるために何をすればいい？

大村
　現場というか、展示会に行って実際にやらないと、本当に、いくら知識だけ入れても実際に経験を積まないといけないことなので、自分のつくることにしても実際にやって店頭に立ったりしてそれで自分で覚えていくしかない。

玄田
　そうするとまだまだ失敗を繰り返さないといけない？

大村
　はい、まだまだです。

玄田
　ありがとうございました。では瀬下さんのご自身の目標というのは？先程おうかがいしましたけど具体的には？

瀬下
　今の林さんと大村さんの話を聞いて少し思ったことがありまして一つのことに没頭する

ことがとても大事だと思いました。それから私の体験の中にもあるんですけども、やはり会社に入っていつもいいことだけではなくて、ちょっと辞めたいなと思うときもあります。自分が店長をしていたときにもう会社の方針や上司や言われることとか、自分のやりたいこととか、たくさんのことがこんがらがってどうしていいのか分からなくなり、どうしようと悩んでいるようなときがありました。とりあえず、どうしていいのかは分からないけれども目の前で、いいお店をつくるというその一つののことだけに没頭するとおのずと道がひらけてくるというのをすごくそのとき感じたことがあって今二人の話を聞いてちょっとそういうことを思い出しました。今若い方が、一つのことに没頭することがとても大事なのかなと思いました。

玄田

ご自身はどうですか？　没頭していますか？

瀬下

今は今の仕事にどっぷりはまっています。

玄田

高成田さんはどうでしょうか？

高成田

はい、私はこの中で唯一三十代ということで、実は子供が二人いるんですけれども、自分の生活もちゃんと守りながら、組み立てながら仕事もできる、そういう働き方をしたいなと思っています。特に協同組合とかＮＰＯはなかなか食べていけないと思われがちで、実際食べていくにはつらいのですが、共働きですけれども、なかなかそういう働き方が難しいのではないかと一般的に思われてしまう。たとえば子供を産むと今、日本でいうと一人に 2000 万円、大学卒業させるまでにかかりますといわれる。するとみな一瞬にして、「え、2000 万円どうやって稼ぐの」となってしまう。実際問題職場の仲間とそういう情報交換をすると、「じゃあ、うちの子供の服をあげるよ」とかいって２歳までうちの子はほとんど服を買わなくなったんですけれども、そうやってお金をかけないで生活していけます。あまり情報に流されないで自分で一歩ずつ踏み出していくということを実践しながら若い人達もどんどん自分なりの働き方、生活をつくっていけたらいいなというふうに思っています。

【まとめ】

玄田

ありがとうございました。今日のお話を聞いていて改めて感じたのは、日本の若者は決して捨てたものではないということです。最初にお話したように、日本の若者というと、なんか元気がない、勉強もしない、無気力だ、そういうことをよくいわれる。しかしながら、それはあくまでイメージであって確かにそういう若者もいるかもしれないけれども、仮に今目標が見つかっていないとしても、その状態に満足しているわけではない。自分自身やりたいことが見つからない中で、どうすればやりたいことを見つけられるのか多くの

若者が悩んでいる。しかも、今日話をうかがった皆さんも、自分自身が何をすべきか何が足りないのか、急に聞かれる中で、ちゃんと自分の言葉で具体的に答えることができます。今日は別に何のシナリオもありません。今日特にこれを聞くからこれを答えてとかはなにもありません。私は若者の問題はもっと若者に任せていいのではないか。若者に起こっている様々な問題は、自分たちと同じ目線で考えることができる若い人達にもっとやってもらっていいのではないか。今まではなんとか若者の問題はすぐ上から大人が高い目線から若者に接することが結果的に多かったのではないか。若者達に大人が適宜アドバイスをすることも必要だけれども、もっと若い人達自身に失敗をさせてあげたり、経験をさせてあげたりすることによって変わっていくのではないか。そういうことを改めて強く思うことができました。

【会場との質疑】

玄田

質問はありますか？

会場からの質問１

私も最近若年者の雇用者問題について少し調べております。今日は、さきほど玄田先生がおっしゃったような、意欲がないとか、働くことに対して目標がもてないといった若者とはまったく違っていて、是非大学に来て話をしていただきたいような若者ばかりです。特に女性の方に。職業人生の中で、男性は、結婚して子供を持つということにあまり変化は無いと思います。しかし、女性の場合、こういう仕事をしたいと思っていても、その先にある結婚あるいは子育てという障害にあたってあきらめてしまうという若い女性もたくさん見ております。そこで、特に自分の職業人生や将来という点とプライベートにかかる問題、結婚して子育てしながらも仕事を続けていくのか、続けていける可能性があるのかというような点を是非うかがってみたいと思います。

玄田

瀬下さんどうですか？

瀬下

そうですね、昔はそういうことを考えなかったのですが、最近結婚、出産という問題がとても自分の身近な問題に思えてきて、私はまだ結婚もしていないんですけれども、やはり不安は感じます。出産するには絶対休まなければならないし、休んでいる間に今の自分のポジションに次の方が入ってきて戻って来たときに自分のポジションがないのではないかという不安にかられたりもします。また、結婚、出産をもししなかったら、このまま一人で自立して生きていくのに大丈夫なのかとか将来的な不安をとても考える年代になりました。ただ最近思うのは、そういう中でもやはり自分は一つこれという仕事を見つけてプロになるということができれば、今の会社にはおさまっていなくてもいいと思っています。例えば、私はワタミという会社で働いていますが、結婚して出産するときにもしかしたら辞めて、子育てが落ち着いたときに次のステップへ、自分の持っているプロフェッショナ

ルなものを生かして次の会社に就職、仕事を見つけるというのでもいいのかなと思い始めてきました。そう考えると、今のワタミでずっと働くというふうに考えると少し難しい点もあるかもしれないなと思うのですが、自分のしたい仕事であれば会社を選ばないということならば、仕事にはこれからも就けるというふうに自信は持っています。

玄田

林さんと大村さんはまだ結婚とか考えないよね？

大村

はい、ちょっとまだ考えられません。

玄田

ただ、いわゆる現場ではサービス残業とかないですもんね。

大村

はい。

玄田

職人であれば結婚と出産は両立しやすいのでは？

大村

はい、私の竹工芸は内職という感じなので、たとえ結婚して子供を産んで休んでも、とりあえず子供が手が離れるようになれば、また仕事を始められることが可能な職業なので、そのあたりは困るということはないと思っています。

玄田

仕事と家庭を両立させるために周りや地域の理解といった最終的に仕事の内容とは関係ない。日本ではまだまだ三歳神話というのが根強くて三歳までは母親が育てないといけないんだというような社会通念みたいなものがなかなかぬけません。本当はそれは科学的根拠はまったくないことであって、やはり子供を健康に育てていくためには皆で育てていく、家族全員で育てていく、地域で育てていく、社会で育てていく、というふうな環境をつくっていかないといけない。女性の両立もそうですし、少子化の問題についてもいい解答は出ないと思う。

会場からの質問２

皆様のご両親が職業選択にどのように関わったのか、どのような影響があったか教えて下さい。

林

私の親は、お前が選んだ所なら、と特に反対しませんでした。

大村

親は特に何かに就けということはありませんでした。私がやりたいと思ってやること、自分で目標を考えてそれに進んでいくというなら応援するという形で支えてもらいました。

瀬下

自分のやりたいことをやりなさいということでした。影響を受けたなと思うことは父が仕事熱心だったのでそういう姿を見ていてとても私に自立心がついたのかなと思います。

高成田

私も父が新聞記者で、地域経済をどうするかということを勉強していたようです。私もメディアというかたちではありませんが、フィールドのほうからどういうふうにつくっていくかということで挑戦していて、特に職業に関して何も言われたことはありません。

玄田

ありがとうございました。時間ですので終了します。